

守った命 そして復興へ

～東日本大震災の現実から学ぶ～

防災教育の在り方は？
震災の現実とは？
学校再開への道のりは？



被災時の陸前高田市気仙中学校

平成24年度実践的防災教育推進事業講演会

主催：須崎小学校実践的防災教育推進委員会
(平成24年度高知県教育委員会委託事業)

講師：岩手県陸前高田市立気仙中学校 前副校長 鈴木秀行 氏
現 岩手県和賀郡西和賀町立湯田中学校長

日時：平成24年7月3日(火) 13:30 受付 14:00 開会 15:45 閉会

会場：須崎市立市民文化会館 大ホール 須崎市新町2丁目7番15号

平成23年3月11日、多くの尊い命が失われた東日本大震災。

その時、被災地の学校現場ではどのような状況が起こっていたのでしょうか。

予想される南海地震に対する私たちの備えは十分なのでしょうか。岩手県陸前高田市の気仙中学校で対応の陣頭指揮にあられた鈴木秀行氏をお招きし、日常の防災教育、災害の現実、そして学校再開・復興への道のり等、大震災の現実とこれからの私たちのあり方について学びます。 《報道事項 アメリカ:アラスカ州に気仙中学校のバスケットボールが漂着》

共催：須崎市・須崎市教育委員会

須崎中学校区地域ぐるみ教育推進委員会

須崎中・須崎小・新荘小・安和小PTA

後援：高知県

できる限り事前申し込みをお願いします。

須崎小学校のホームページからも申し込みいただけます。

問合せ等

須崎小学校実践的防災教育推進委員会事務局

須崎市東糺町2番9号

須崎市立須崎小学校 担当 山岡

TEL 0889-42-1741 FAX 0889-42-1743

URL <http://www.kochinet.ed.jp/susaki-e/>



平成24年度実践的防災教育推進事業講演会

開催要項

1 趣旨 現在、本県では防災への対応が喫緊の問題となっています。特に先の東日本大震災において西日本で唯一津波の被害を受けた須崎市では防災への備えが最重要課題といえます。本年度須崎市立須崎小学校が平成24年度実践的防災教育推進事業の指定を受けるに当たり、実際の被災校より講師を招き東日本大震災の実際や学校再開までの道のり、その後の子ども、保護者、地域とともに歩んだ復興への現実の取り組みをお聞きし、本校、本市の今後の実践的防災教育への一途とします。また、この取り組みを市内外へ広く発信します。

2 主催 須崎小学校実践的防災教育推進委員会（平成24年度高知県教育委員会委託事業）

3 共催 須崎市 須崎市教育委員会 須崎中学校区地域ぐるみ教育推進委員会
須崎中学校・須崎小学校・新荘小学校・安和小学校PTA



陸前高田市立気仙中学校（被災当時）

4 後援 高知県

5 日時 平成24年7月3日（火） 14:00～15:45

6 会場 須崎市立市民文化会館 大ホール（須崎市新町2丁目7番15号）

7 日程	13:30	14:00	14:10	15:30	15:40	15:45
	受付	開会行事	防災講演会	質疑	閉会行事	

8 講師 岩手県陸前高田市立気仙中学校 前副校長 鈴木秀行 氏（被災当時）
（現 岩手県和賀郡西和賀町立湯田中学校長）

9 参加申込

講演会は須崎中学校区の各小学校上学年生及び須崎中学校生、須崎高校1年生の総見となっています。参加ご希望の方はできる限り事前参加申し込みをお願いいたします。

須崎小学校のホームページからも申し込みいただけます。URL <http://www.kochinet.ed.jp/susaki-e/>

参加申込・問合せ等

須崎小学校実践的防災教育推進実行委員会事務局 高知県須崎市東糺町2番9号

須崎市立須崎小学校 TEL 0889-42-1741 FAX 0889-42-1743 担当：山岡

～ 実践的防災教育推進事業講演会参加申込書 ～

本紙のままFAXで申し込み下さい FAX番号 0889-42-1743

参加者氏名	市町村名	所属等

※3名以上の場合にはご記入者3名を含む合計人数を下欄にご記入ください。

合計参加者 _____ 名

平成24年度実践的防災教育推進事業講演会

平成24年7月2日(火) 14:00~15:45 須崎市立市民文化会館大ホール

講師：岩手県陸前高田市立気仙中学校 前副校長 鈴木秀行 氏

(現 岩手県和賀郡西和賀町立湯田中学校校長)

講師プロフィール

平成12～13年度

岩手県岩手郡葛巻町教育委員会 指導主事

平成14～16年度

岩手県東磐井郡大東町教育委員会 指導主事

平成17～19年度

岩手県一関市教育委員会 主任指導主事

平成20～23年度

岩手県陸前高田市立気仙中学校副校長

平成24年度～

岩手県和賀郡西和賀町立湯田中学校



被災当時の陸前高田市立気仙中学校校舎

陸前高田市立気仙中学校は、海岸に面して立地しており、日頃から、津波については関心が高く、地域をあげて防災への取り組みを行っていました。

平成23年3月11日午後、東日本大震災による津波が校舎を襲いました。

東日本大震災：「必ず卒業式を開く」 陸前高田の中学教諭が誓い / 岩手

毎日新聞 2011年3月15日 地方版

壊滅的な被害を受けた陸前高田市気仙町唯一の中学校、市立気仙中は校舎が倒壊し、15日に予定した卒業式を開くめどが立たないでいる。廃虚と化した同校に卒業アルバムなどを探しにきた同校の中里勝明教務主任(48)はぼうぜんとして学校跡地を見つめていたが、「何カ月、何年たったとしても必ず卒業式を開く」と誓った。

11日午後2時40分ごろ、3年生25人は体育館で卒業式の予行練習をしていた。午前中には卒業アルバムも届き、あとは式を待つばかりだった。そこに突然の地震と津波。生徒と教員は早い段階で近くの公民館に逃げ込み全員無事だったが、津波は卒業証書、卒業アルバムを、生徒たちから奪い去った。

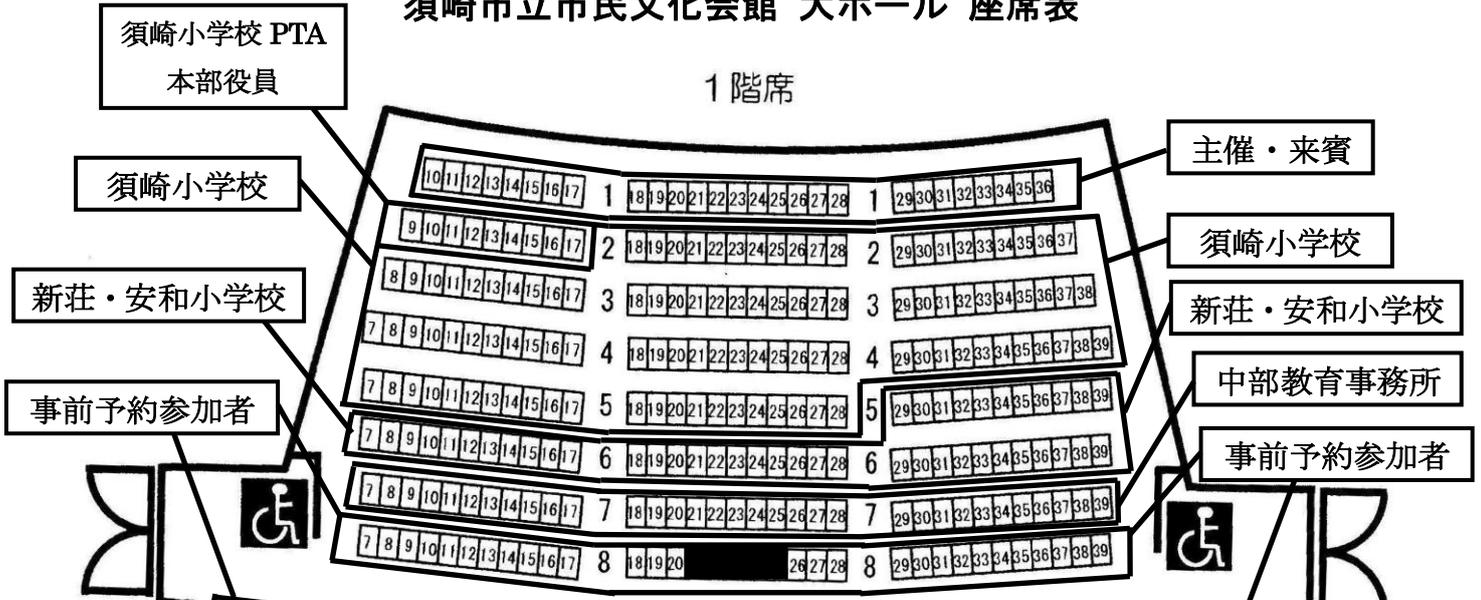
一部の生徒は今も避難所で過ごしている。おもしろい話で避難所に明るい雰囲気を作り出すムーブメーカーばかりだ。

3年生の副担任、蒲生正光先生(46)は、25人の生徒たちを「このつらさを乗り越えられる。その時は手作りでも卒業証書をあげたい」とほほえんだ。卒業予定の佐藤駿さん(15)は「卒業アルバムは流されたけど、この地震で仲間がいる幸せを知った。今心にある思い出をいつかみんな形にしたいです」と話した。

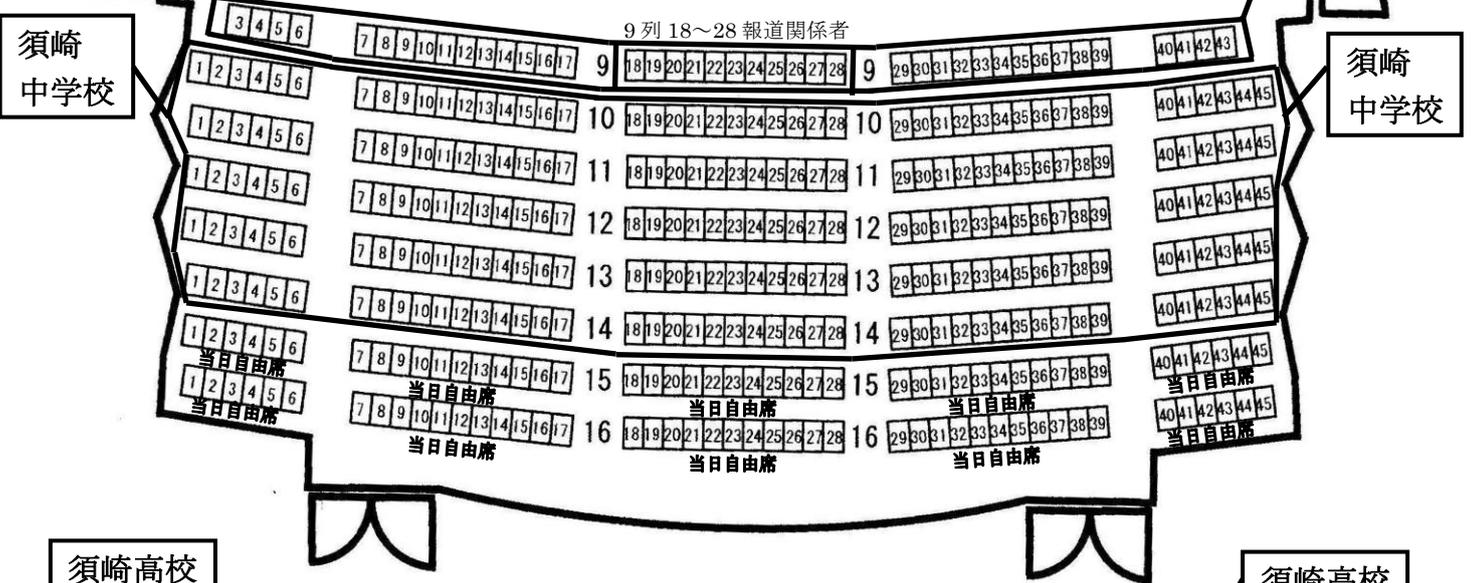
平成24年度実践的防災教育推進事業講演会

須崎市立市民文化会館 大ホール 座席表

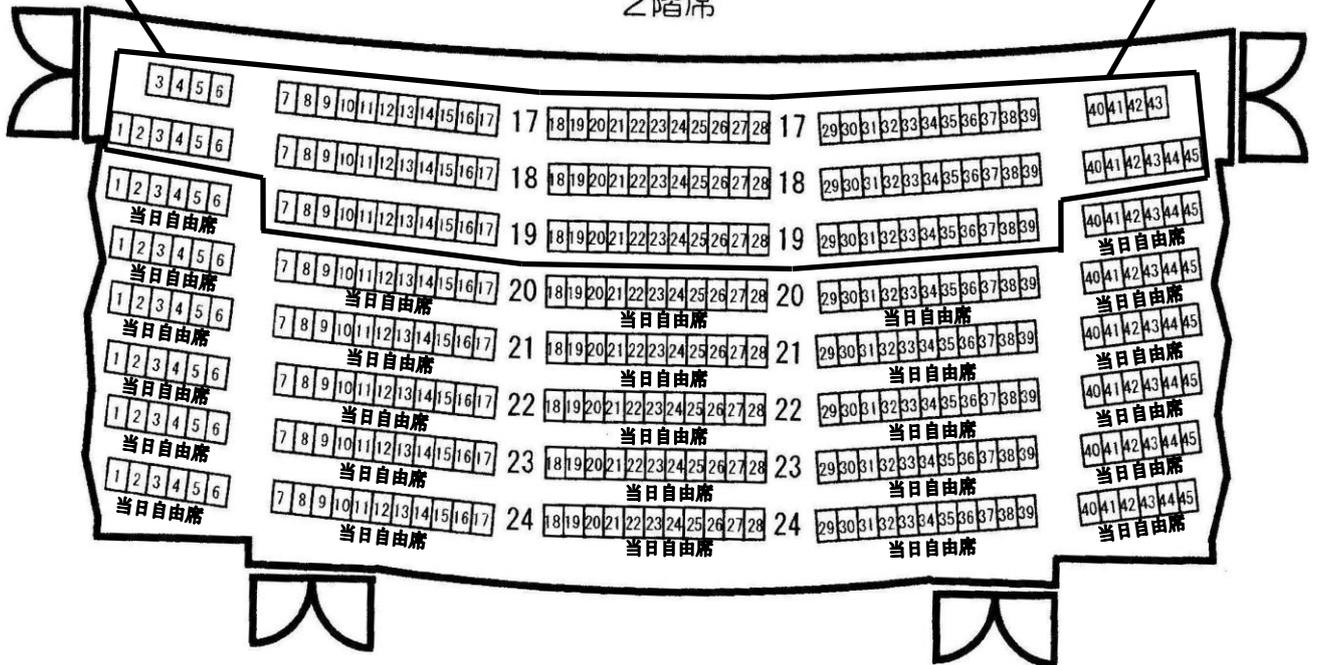
1階席



9列 18~28 報道関係者



2階席



実践的防災教育推進講演会
守った命そして復興へ
〜東日本大震災から学ぶ〜

平成24年7月3日(火)
須崎市民文化会館大ホールに
おいて、岩手県陸前高田市立
気仙中学校前副校長鈴木秀行
先生(現在は他校校長)を講
師に招いて防災教育の講演会
を行いました。

この講演会は本年須崎小学
校が国、県の防災教育の指定
事業を受けその一環として開
催したものです。また、須崎
中学校区の連携事業として、
須崎、新莊、安和小学校の5、
6年生、須崎中学校の全校生
徒、須崎高校の1年生も総見
として参加しました。

東日本大震災については、
マスコミ等で繰り返し報道さ
れ、震災時に津波が町を襲う
様子やその後の救援、復興活
動などは私たちの脳裏に刻み
つけられました。しかし、そ
の時学校現場では何が起こっ
ていたのでしょうか。

今回の講演講師の鈴木校長
先生は震災発生時に当時の赴
任校で生徒の避難の陣頭指揮
をとり、その後の避難生活や、
学校再開・復興活動までを身
をもって体験されました。

鈴木先生は実際の写真を使
いながら「私たちの知らなかつた
学校現場の現実」を生々しく語
ってくれました。



平成23年3月11日、6校
時、翌週15日に卒業式を控え
全校生徒は体育館に集まり合
唱練習をしていました。午後
2時46分マグニチュード9
の大地震が発生しました。

即座に全校生徒を日々避難
訓練を重ねてきた所定の避難
場所に(第1避難場所)誘導。

3時26分、大きな引き潮
の後、津波の第1波が学校の
近くの防波堤を超え、現在の
避難場所では危険と判断し、
想定外の山へ避難を開始。

その後、山の第2避難所へ
到着しました。その頃には津
波が陸前高田市の町を飲み込
みはじめ、その様子を見てい

た生徒からは、目の前に広が
る信じがたい光景に、家族な
どを心配して悲鳴や泣き声か
上がりパニック状態が発生し
ていました。



(津波に飲み込まれる陸前
高田市)

この状態を回避するために
全生徒とともに、さらに山を
登り町の様子が見えない林道
に移動し、担任の先生方が生
徒に寄り添い、励ましにつづ
きました。津波来襲から約10分
で陸前高田市の町が完全に水
没しました、その時の様子を
鈴木校長先生は「目の前を
家々が流されていきます。流
れていく家の屋根には2人の
男性がいました。1人は茫然
としたまま町を見つめ、もう
1人はすつくと立ってこちら

を見つめていました。目を疑
う光景でした。今でも目に焼
き付いています。」と語られま
した。



(水没していく気仙中学校)

その後、公民館に全校生徒
を移動させ近隣の方々から
いただいた毛布を何人もで使
し、余震の恐怖と寒さに耐え
ながら一晩を過ごしました。
「その夜は、とてもきれいな
星空でした。流れ星もたくさ
ん見えました。一生涯忘れる
ことのできない夜となりました。」と3月11日の夜のこ
とを話されました。

警報が解除された後、中学
校を確認しに行くと、堤防は
完全に破壊され、校庭は海と
なり、校舎は屋上まで波が達

し、内部は全壊していました。
「体育館は姿をなくし、周辺
には赤い布のついた棒がたく
さん立っていました。一緒に
いた先生が、それは発見され
たご遺体があることを示して
いることを教えてくれました。
周りを見回すと、辺り一面に
赤い布がついた棒が立ってい
ました。本校の学区の約4分
の3の家々があの日を境に消
えてなくなりました。」

陸前高田市では死者200
9人、行方不明者41人、負傷
者不明、家屋全壊3159棟、
人口の10%が失われました。

その後、近隣の小学校で家
屋を失った人たちの避難生活
が始まりました。地区ごとに
班を作り教室が割り当てられ
ました。この時点でまだ引き
取られていない生徒30名と
教員は学校班となりました。
朝昼晩の食事は3食とも小さ
なおにぎりが1つでした。水
さえも出ません。しかし、生
徒たちは誰1人不平不満を言
いませんでした。

避難所では中学生が大きな
戦力になりました。食材の搬
入、食料の仕分け、不定期で
やってくる支援物資の搬入、
掃除、トイレの水汲み、まき
拾い、薬剤師の助手となって

カルテ等の作成など、とにかく全員が働きました。

「今、実際に起きていることを理解し、その日を精一杯生きていたのだと思います。大きな悲しみを一時でも忘れようとしていたのかもしれない。」



学校班が最後の生徒を保護者にお返しできたのは3月23日でした。12日間を要しました。(何名もの保護者が亡くなり、両親を亡くした生徒もいました。)

校舎を失った気仙中学校では廃校になった小学校を与えられ学校を再開しました。気仙町から15kmほど離れた山あいの学校です。この時、体育館はまだ遺体安置所にな

っていました。

この学校の被害は少なく電気も水道も使用できました。地震がうそのような環境です。

5月の気仙中学校生徒大会では「・・・気仙中学校の形あるものは全て失われまし

た。・・・地震や津波は私たちの心に深い傷を残しましたが、全国の皆さんからのやさしい気持ちを知ること、全校がより強く一つにまとまって目標に進むことができるようになりました。この気仙中復興宣言をまとめることで、支援、声援を下さった皆さんと自分たち自身に気仙中復興に向けて取り組むことを誓います。」という「気仙中学校生徒会復興宣言(中略)」が採択されました。



感謝と自分たちの決意が込められています。形のあるものは失っても、形のない文化を継承しよう。感謝の気持ちを立て看板の作成。お礼状を送ることなどが盛り込まれています。

生徒たちは4月は避難所の疲れや先の見えない不安、修学旅行や部活動もできない環境で暗い表情で元気もありませんでした。お風呂にもあまり入れない状況で体を動かしたり汗をかいたりすることを嫌がっていました。実際に教室には独特の匂いが漂っていました。

その後、県内外、全世界から温かい支援をたくさんいただき、ホールは学用品等の支援助物でいっぱいになりました。名古屋市からも招待を受け飛行機を使っての職業体験学習に1、2年生は参加することができました。

北海道から転校してきた父親を亡くした生徒のつながりで音楽グループZONEのミニライブも行われました。数多くのお手紙やメッセージも寄せられ校舎内いっぱいに展示しました。支援を頂いた方々には全校生徒で手分けして直筆のお礼状を書きました。



(9月1日被災後初めての温かい給食に喜ぶ生徒たち。)

「失ったものはたくさんありましたが、しかし、得たものもいっぱいありました。当たり前のことが奇跡であること人とのつながり人のやさしさ。生徒たちは、震災を通して、故郷への思いが強くなったように思います。保育士になって子ども笑顔を増やしたい。医師になって地元に戻ってくる。市の職員になって復興の役に立ちたい。と夢や希望を語ってくれました。」

この後、震災を通してのメッセージを頂きました。

- ① 地震後、津波は必ず来る。すぐに高い所へ避難。
- ② 時間との戦い。

- ③ 命が最優先。
- ④ 現実は無想定を超える。
- ⑤ 計画は基本、臨機応変に。
- ⑥ 危険予知能力危機回避能力をイメージすること。

などです。

当時の気仙中学校3年生の書いた日本語大賞最優秀賞作文「感謝が結んだ絆」が朗読され会場には涙する人の姿も見えました。

最後に「須崎市の児童生徒の皆さん！命を大切に！そして生きぬいて、自分の夢を実現させてください。」という言葉を頂き講演は終了しました。

将来予想されている南海地震に備え各地で東日本大震災を教訓として防災への備えが進んでいます。須崎小学校ではまず、「震災時の実際の学校の現状を知るためにこの講演会を企画しました。」

この講演会全体を収録したDVDをご家庭や各職場での防災教育研修のために配布を行っています。須崎小学校のホームページから申込んだだけですのでぜひご覧ください。

須崎市立須崎小学校

防災教育担当 山岡

高知

高知支局

〒780-0053

高知市駅前町

5-5

大同生命ビル2F

☎ 088-884-9111

884-9112

FAX 884-9109

ホームページ

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/kochi/>

通信部

安芸 0887-35-2002

須崎 0889-42-0748

四万十 0880-34-3011

「避難臨機応変に判断を」

須崎 岩手の中学 副校長講演



被災時の対応や教訓を語る気仙仙中学校の鈴木前副校長(須崎市立市民文化会館で)

東日本大震災の津波で校舎が全壊しながら、生徒全員が助かった岩手県陸前高田市立気仙中学校の前副校長、鈴木秀行さん(51)が3日、須崎市立市民文化会館(新町)で講演した。当日は状況を見ながら避難先を変更したと語り、「想定にとられない臨機応変な判断が大切」と訴えた。県の実践的防災教育推進校の須崎市立須崎小学校などが企画し、市内の小中学校の児童・生徒ら約500人が参加した。気仙中は「奇跡の一本松」の近くにあり、当時、生徒86人が体育館で卒業式の予行練習をしていた。「地震が起きると、必ず津波が来る」と考えていた鈴木さんはすぐに標高8分の避難場所に生徒を誘導した。

その後、標高約50分の高台へと移動。その間、津波は高さを増し、民家や3階建ての校舎をのみ込むのが見えたため、中腹からさらに上を目指したという。市内の死者・行方不明者は2050人に上ったが、生徒と教職員は無事だった。

鈴木さんは「震災発生時は時間との闘いになる。第一波で安心する人もいるが、命が最優先なので、忘れ物があっても絶対に戻らないでほしい」と強調。「訓練をしっかりやればやるほど、避難時の混乱を避けられる」と述べた。

講演を聞いた須崎中2年

藤田玲奈さん(13)は「多くの命が失われたことを胸に留め、真剣に防災を考えていかなければいけないとあらためて感じた」と話していた。

津波時の漂着物対策 須崎市が検討委発足

来月にも初会合

須崎市の楠瀬耕作市長は

3日、南海トラフによる巨大地震で津波が発生した場合、漁船やがれきが内陸部に押し寄せるとの危険をめぐり、対策を検討する委員会を設置すると発表した。8月上旬に初会合を開き、年内に対策をまとめるとしている。

東日本大震災では、漂着したガレキから火災が発生し、撤去作業などは今も続いている。同市も昭和南海

地震(1946年)で須崎港の漁船や沿岸の木材が市街地に押し寄せており、沿岸約500分の防護網(高さ約5分)以外の対策が必要と判断した。

委員会は、島谷幸宏・九州大教授(河川工学)を委員長に市、県、消防、警察、自主防災会のメンバーらで構成を予定。避難時に車の使用を許可するかなども協議するという。

須崎市

「命が最優先」

大震災で中学生避難誘導 岩手の元副校長講演

【須崎】東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市の気仙中学校で、生徒の避難を指揮した鈴木秀行副校長(現・西和賀町の湯田中学校長)が3日、須崎市で講演。津波のスライドを交え、緊迫した避難の様子を紹介し、市内の児童生徒や保護者ら約700人に「何よりも命が最優先。訓練に真剣に取り組んで」と訴えた。写真。鈴木さんは地震発生



後、「地震後、必ず津波が来る」と、すぐに全校生徒を海拔0メートルの学校から海拔8メートルの避難所に避難させた。しかし、近くの川の堤防を波が越えるのを見て、高さが不十分と判断。急ぎよ生徒を誘導し、避難車両で渋滞する国道を横切り、約50メートルの山に避難した。「校舎の高さの海が平行移動してやってくる感じ」という津波が3階建て校舎を飲み込んだが、生徒86人は全員助かったという。他校の校舎で学校を再開したものの生徒のシヨックは大きく、机に「死にたい」と書いた女子生徒も。「心のケアが本場に大事で、担任らが面談を繰り返した」と紹介し、文化祭や給食の再開を通じ生徒が「当たり前」の事ができる幸せをかみしめた」と振り返った。

鈴木さんは「すぐに高いところへ、時間との闘いです。現実(の災害)は何でもありだ。想定にとらわれず逃げて生き抜いて」と強く呼び掛けて講演を締めくくった。須崎中1年の真島(ましま)桐生君(13)

は「津波の悲惨な光景が印象に残った。もつたにしていた。と真剣に避難に向き合
いたい」と心構えを新たにしていた。
(八田大輔)